１　江戸時代まで

わが国に野牛が存在していたことは化石などで証明されているが、魏志倭人伝（３世紀）には、牛馬はいなかったと記載されている。牛は弥生時代（紀元前３世紀から紀元後３世紀）以後にわが国に運ばれてきて広がっていった。和牛のルーツとしては、ユーラシア系の牛が北海道、東北を経て広まり、その後朝鮮半島から黄牛が導入交配されたとする説と南方系の牛が朝鮮半島を経て、北九州の稲作文化とともに東に広がっていったとする説がある。

鎌倉時代までの絵巻などを見ると、牛の姿は今のような和牛とは似つかないもので、黒や赤、白黒まだら、背中に褐色の模様（すだれ）模様などさまざまであった。江戸時代に入る頃には黒色が強く現れるようになる。

牛馬は農耕、運搬などの重労働に役用として利用され、牛馬を増やすことは国を豊かにする最重要な施策であった。675 年には天武天皇が「食肉禁止令」を、741 年には聖武天皇が「牛馬を殺した者には、杖で百叩きの刑に処す」とある。江戸時代には 1687 年に徳川綱吉の「生類憐みの令」が発令され、家畜だけでなく犬や猫までも含めたためにこの令の評判はすこぶる悪かった。これは 1709 年に解かれたが、牛馬に限ってはそれ以降も貴重な家畜として取り扱われ、一般に食することはなかった。

（１）牛馬の扱い

牛馬は荷物の運搬、農作業など重労働になくてはならないものであった。このことから、675 年天武天皇は「食肉禁止令」を発し、741 年聖武天皇は「牛馬を殺した者は、杖で百叩きの刑に処す」との記述がある。生産を拡大するには牛馬の力が欠かせないものであったため、牛馬を大切に扱った。

（２）国牛十図　寧直麿　延慶３年（1310）

鎌倉末期、優れている牛を集め産地や容姿などを記載した絵巻である。この中には「馬は関東をもってさきとし、牛は関西をもって基とす」と書かれている。この絵巻では、筑紫牛、御厨牛、淡路牛、但馬牛、丹波牛、大和牛、河内牛、遠江牛、越前牛、越後牛の 10 種を表している。その他に出雲、石見、伊賀、伊勢などにも良い牛がいることを伝えている。

黒や赤、白黒斑、背中に褐色の簾模様のあるものが占め、外貌は現在の黒毛和種とは大きく異なっている。牛の特徴の記載では、駿牛と言う表現が最も賛辞した言い方で、

次いで、逸物で、逸物には評価の大少の割合を記載している。これを見る限り、但馬牛は駿牛としての記載があり、十図の中で最も役牛としての高い評価を与えられていた。

国牛十図の牛特徴の記載

1　筑紫牛：姿良く、本来は壱岐島産である。
2　御厨牛：肥前国御厨の産で逞しい牛である。
3　淡路牛：小柄であるが力強く、逸物も少ない。
4　但馬牛：腰や背ともども丸々として頑健であり、駿牛が多い。
5　丹波牛：但馬牛とよく似ており、近年、逸物が多い。
6　大和牛：大柄であるという特徴がある。
7　河内牛：まあまあというところで、駿牛も存在する。
8　遠江牛：蓮華王院領の相良牧の産である。
9　越前牛：大柄で逸物が多い。
10　越後牛：力が強く、まれに逸物がある。

このほかにも、出雲、石見、伊賀、伊勢などにもよい牛がいることを伝えている。

（東京大学農学部図書館蔵）

駿牛図（すんぎゅうず）の記載

1369 年（応年２年）東京国立博物館所蔵

鎌倉時代前期に描かれたもので、牛は牛車を牽く貴重な動力源として尊重された。名牛、駿牛を描き集めた図巻で、10 図の内、８図が現存する。

（３）　吉利支丹大名の高山右近が蒲生氏郷に牛肉を振る舞う

近江牛には、400 年の歴史があるとされると言われてきた。その根拠は、細川家御家譜に牛肉を振る舞った記載に基づくものである。

1590 年　小田原城攻めの陣中見舞いとして高山右近が、蒲生氏郷、細川忠興らを招いて、牛肉料理を振る舞う。細川家御家譜（ごかふ）には、「高山は元来、吉利支丹なれば牛を求め置きて振廻はれしが、一段珍敷風味なりとて、たびたびお尋ね成され候」と記載がある。

しかし、当時の状況を勘案すると生牛を陣の近くで屠殺して振る舞ったと考えられるが、牛をどこで調達したかは定かではない。

高山右近

当時、欧からの渡来人、宣教師は肉食文化を持ち込んでいたと考えられ、熱心なキリスト教信者である高山右近（洗礼名ユスト）は、その影響を強く受けていたのではないかと考えられる。

高山家の出身地は甲賀の地侍「甲賀五十三家」（甲賀流忍者）と言われている。また、秩父氏（平家）の一派の高山党とも言われているが、父の友照が仕えた和田惟政の生家は甲賀であることから、近江の出であろうと推察できる。高山右近は父の友照が大和国宇陀郡の沢城（奈良県宇陀市榛原）を居城とした時に生まれた。和田惟政の没後、

和田惟長との一戦を交えて、高山右近は高槻城主となる。

蒲生氏郷

初代は日野城主から松阪城主となり、この地域を「松阪」と名付けた。次いで、奥州会津城主となった。1588 年の松阪城の築城には、石積みで名高い穴太衆を、町には日野商人を招いたとの記録がある。蒲生氏郷は松阪には２年しか居なかったが、このことが、松阪の商人である三井家の誕生につながり、商人同志の情報が共有されていたためであろう、近江では明治２年に初めて牛を東海道で運び始めるが、明治５年には松阪も牛を運び始めている。商人の連携がブランド牛である松阪牛を育てる契機になったものと推察できる。

以上の経歴から、高山右近と蒲生氏郷は、同郷の親しき友人であったことが窺われる。また、高山右近の影響を受けて、蒲生氏郷は「レオ」と言う洗礼名をもっていることや細川忠興の妻はガラシャであることから、キリスト教信者として親しき友であったことが窺える。

しかしながら、小田原城攻めの時には、高山右近は高槻城に、蒲生氏郷は松阪城に居たことから、居城から離れた近江の牛を運んだかどうかは疑わしい。このことから、新たな事実がない限りは、400 年の歴史とは言い難い。